

## 越境精神

小長谷 有紀

当初、東北地方太平洋沖大震災とよばれていたときと違って、東日本大震災とよばれるころになると、天災よりも人災が驚異的な状況を呈すようになってきた。半減期が2万年余りでその後もなくならないプルトニウムなどによる放射能汚染が、いまなおじわじわと続いている。これこそ未曾有の災害である。

んできてしまった。私たちは今、エネルギーを含めて生活のありよう全体について見直しを迫られている。経済的かつ人道的な、新しい方法を求める段階に来ているのだ。

3・11は、私たちにこれからの課題をはっきりと教えてくれた。地球との新しいつきあいかたを模索することに。犠牲者を心から悼む道はそこにはないのではないだろうか。未来をえがくときが来たのである。

## ウメサオタダオ展



開催中の「ウメサオタダオ展」。膨大な調査資料などが展示されている—大阪府吹田市の国立民族学博物館

人類学は、おとなの学問であるとともに、おとなになるための学問である。

カード法は、歴史を現在化する技術であり、時間を物質化する方法である。

それはわたしの民族は写真的先行形態であるのだ

発見しているのは、たいへんつくやうなものである。

資料全部を項目別にはらしてカードにしようという方法。

## 未来をえがくときが来た

## 梅棹忠夫の残したもの

1

市民一人一人が、社会のプランナーになる、そんな時代の到来が予感される。「国難」だからといって、国が頼りにならないことは重々承知してしまっただけ。政治家たちに任せておくことはもちろん、財界や学界のリーダーたちに任せておくことも、もはやできないと、あからさまにわかったから。

だから、考える主役は私たち自身になる。専門という壁を乗り越えて、よく学び、よく知り、よく実践する。一人一人がそれをめざすとき、梅棹忠夫の残した精神は大いに役立つのではないかと私は思う。

大地震の直前、3月10日に国立民族学博物館でウメサオタダオ展が始まった。私はその準備をしながら、彼の残したたくさんの資料を探検した。それらを紹介しながら、未来へのイマジネーションをかきたててみたい。これからの生き方を考えるみちゆきに、しばらく同行いただければ幸いである。



こながや・ゆき  
国立民族学博物館教授。昭和32年、大阪生まれ。京都大学文学部在学中、日本人女性として初めてモンゴル人民共和国に留学。以来、モンゴルを中心に内陸アジアの遊牧社会の研究に従事している。近年では、社会主義的近代化をキーワードに、20世紀の証言集を精力的に刊行してきた。国立民族学博物館の初代館長、故・梅棹忠夫氏の残した資料を用いた「ウメサオタダオ展」をプロデュースした。著書に、『モンゴルの二十世紀—社会主義を生きた人びとの証言』、『世界の食文化(3)モンゴル』など。

学